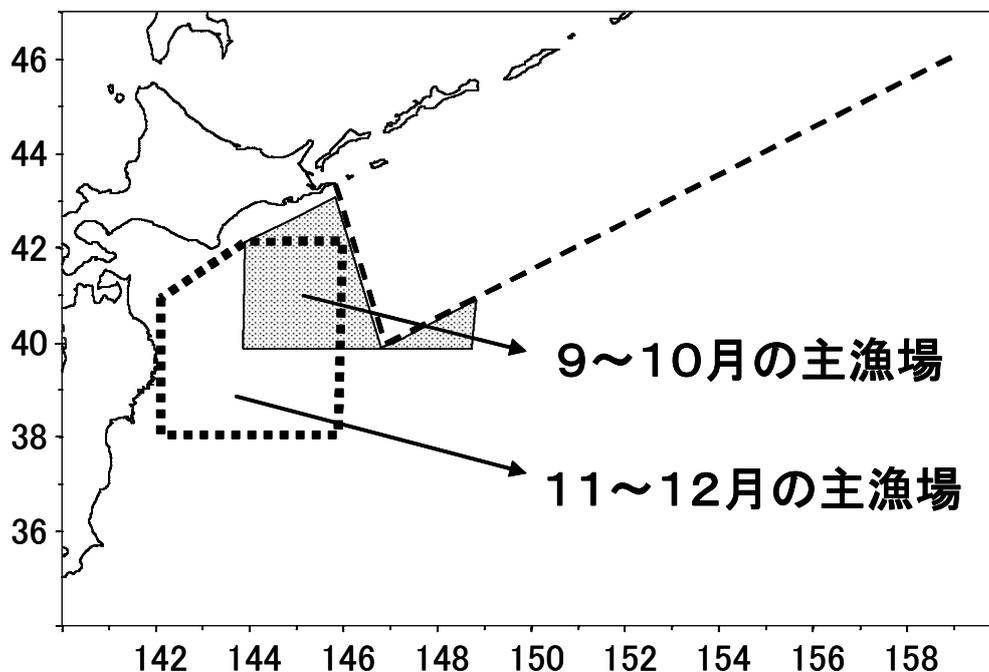


平成17年度北西太平洋アカイカ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2005年9月～12月)

155°E以西の北西太平洋におけるアカイカの来遊水準は2004年を下回り、サイズも小形



1. 本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>) 及び北海道区水産研究所のホームページ (<http://www.hnf.affrc.go.jp/>) に掲載されます。

2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は以下のとおりです。

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

電子メール：mitsuhito_kasahara@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 企画連絡室

〒085-0802 北海道釧路市桂恋116番地

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355、電子メール：hnf@ml.affrc.go.jp

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班
北海道立函館水産試験場	
青森県水産総合研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
岩手県水産技術センター	東北区水産研究所 八戸支所 遠洋水産研究所
宮城県水産研究開発センター	
福島県水産試験場	
茨城県水産試験場	
社団法人 漁業情報サービスセンター	

平成17年度北西太平洋アカイカ漁況予報

今後の見通し（2005年9～12月）

対象魚種：アカイカ

対象海域：155°E以西の北西太平洋

対象漁業：いか釣り

対象魚群：冬春生まれ西部系群（2005年級群）

魚体の大きさは外套背長で表示

- (1) 来遊水準：2004年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：9～10月の主漁場は、40°N～43°N、144°E～149°Eに形成される。
11～12月の主漁場は、38°N～42°N、142°E～146°Eに形成される。
- (3) 魚体：2004年より小形で、30cm以上の大形個体の割合は低い。
10月の魚体は24～30cmが主体。

漁況の経過（2005年4～8月）および見通しについての説明

(1) 資源水準

漁獲対象系群の資源水準を中型いか釣り船のCPUE（1船1操業当たり漁獲量）から推定すると、1970～1990年代初頭にかけて減少傾向で推移していたが、その後増加に転じ、1993～1998年は高い水準を維持していた。しかし、1999年に再び減少し、2002年までは低い水準で推移していたが、2003年には再び1998年以前の水準にまで増加した。2004年のCPUEは2003年を下回り、1999年並の水準まで低下した。また、2004年の漁獲量（9～12月、製品重量）は360トンであり、2003年（6,255トン）の約6%にまで大幅に減少し、2002年（478トン）をも下回った。しかし、試験研究機関調査船による漁獲試験結果も合わせて検討すると、2004年の資源水準は1993～1998年の高い水準を保っていたと推定される。そのため、2004年の漁獲量減少は資源水準の低下が主因ではなく、アカイカを対象とした漁業が9～12月に殆ど実施されなかったことによると考えられる。近年、アカイカ漁業の主力である中型いか釣り船は、日本海等でのスルメイカ漁業に重心を移しているため、年々の操業状況によりアカイカの水揚げ量が資源水準とは関係なく大きく変動する結果となっている。

(2) 関連調査結果

- ・予測対象海域へのアカイカの来遊量および分布状態等を把握するために、試験研

究機関等の調査船によるいか釣り漁獲試験が、三陸～北海道の太平洋海域（155°E以西）において、2005年6月中旬～7月上旬（第1次漁場一斉調査：7隻）、8月下旬～9月上旬（第2次漁場一斉調査：6隻）に実施された。

- 6月中旬～7月上旬の第1次漁場一斉調査によれば、アカイカの漁獲は38°N～39°N、146°E以東の海域で多く、146°E以西での漁獲は少なかった。調査での有漁調査点割合および平均CPUE〔各調査点CPUE(釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)の平均〕は43.8%と0.7(尾/台/時)であり、2004年の調査での37.7%と4.7(尾/台/時)に比較すると有漁地点割合は若干増加したものの、CPUEが大きく減少した。
- 8月下旬～9月上旬の第2次漁場一斉調査によれば、アカイカは津軽海峡周辺～襟裳岬西部を除く三陸沿岸～道東沖合域で漁獲され、特に144°E以東の沖合域で高いCPUE〔22, 30, 94(尾/台/時)〕を示す調査点も3ヶ所認められた。2005年の有漁調査点割合および平均CPUEはそれぞれ60.4%と4.5(尾/台/時)であり、2004年〔54.6%, 9.7(尾/台/時)〕に比べ有漁地点割合は高く、CPUEは低くなっていた。CPUEで比較すると2005年は、近5年平均の67%の水準に低下していた。

(3) 2005年の各海域の漁況経過（主に4～8月末まで）

- 北海道太平洋海域：道東近海では8月末までに110kgの水揚げ（前年0）。道南では4月以降の水揚げ無し（前年0）。
- 三陸海域：八戸港の7月末までの水揚げは1,302トンであり前年（1,488トン）をやや下回った。なお、7月までの漁獲主体は170°E以東の海域であり、本予報で予測する系群とは異なる群が漁獲の対象となっている。岩手県主要港での8月末までの水揚げは12.6トン（前年1トン）。宮城県主要港での9月3日までの水揚げは1.2トン（前年8月末までは0.8トン）。
- 常磐海域：福島県主要港での7月末までの水揚げは無し（前年0）。茨城県での7月末までの水揚げは無し（前年0）。

(4) 魚体の大きさ

- 2005年8月下旬～9月上旬に実施された太平洋いか類第2次漁場一斉調査で、いか釣り機によって漁獲されたアカイカの外套背長組成は20cmにモードを持つ単峰型であり、17～23cmの小型個体の比率が高くなっていた。一方、2004年同期の外套背長組成は26cmにモードを持つ単峰型であり、24～30cmの大型個体の比率が高くなっていた。比較すると2005年は24cm以上の大型個体が少なく、23cm以下の小型個体が主体であると考えられる。
- アカイカの月間成長量は村田・早瀬(1994)によると、6～10月で2.7～4.0cmと推定されている。

(5) 東北海区海況予報

- ・アカイカの分布・移動は黒潮系暖水、暖水塊並びに親潮の動向と密接に関連している。2005年9～11月の東北海区の海況は次のように予測されている(平成17年度北西太平洋サンマ長期漁況海況予報会議東北海区海況予報資料による)。
- ・近海(146°E以西)の黒潮の北限位置は、平年並～やや南偏(35°30'N～36°30'N)で推移する。
- ・黒潮系暖水(100m深10°C以上)の北限位置は、近海で南寄りに推移する。
- ・釧路南東沖合、三陸沖の暖水塊は北東に、常磐沖の暖水塊は北西に移動する。
- ・親潮第1分枝の張り出しは、やや北偏(41°N以北)で推移し、三陸～常磐近海に冷水域が残る。
- ・親潮第2分枝の張り出しは、平年並～やや北偏(39°30'N以北)で推移する。
- ・津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、平年並(143°10'E付近まで)で推移する。

(6) 今後の見通しの説明

- ・いか釣り漁獲試験結果から、北西太平洋に來遊するアカイカ冬春生まれ西部系群の資源水準は、近年では高水準であった2003、2004年を下回り、2001年並みの水準に低下したと推測される。
- ・近年、アカイカ漁業は中型いか釣り船の減少およびスルメイカ漁業との兼業等の影響を受け、以前とは操業形態が大きく異なっている。中型いか釣り船の漁獲成績報告書を解析した結果(篠原ら、未発表資料)、1999年以降、9～10月のアカイカ主漁場は39°～43°N、142°～149°E、表面水温15～21°Cの海域に形成されていた。また、11～12月の主漁場は、37°～42°N、142°～146°E、表面水温11～17°Cの海域に形成されていた。1998年以前は150°E以東の海域にも漁場が形成されていたが、1999年以降は殆ど利用されていない。
- ・2005年8月下旬～9月上旬に実施された第2次漁場一斉調査によると、アカイカが多獲された海域は39°N～42°N、144°E～148°Eの海域であった。
- ・2005年9～11月の東北海区の海況は、親潮第1分枝がやや北偏、沖合の親潮第2分枝が平年並～やや北偏、黒潮系暖水が平年より南寄りと予測されていることから、9月以降のアカイカの主分布域は、近海域では平年よりも北偏し、沖合域ではほぼ平年並と考えられる。
- ・月間成長量を考慮すると、10月の漁獲主体は24～30cmになると推定される。